

コロナ禍における基礎看護学実習の代替策とした シミュレーション演習の取り組み

—模擬患者の状況に合わせて段階的に看護過程を展開した学生の学び—

飛 世 真理子 (千葉大学大学院看護学研究院)
齊 藤 しのぶ (千葉大学大学院看護学研究院)

目的:本研究の目的は、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において、模擬患者の状況に合わせて段階的に看護過程を展開した学生の学びを明らかにすることである。

方法:5日間の看護過程を学内シミュレーション演習において履修することになった2年次学生82名を対象とした。演習のまとめで用いたグループ発表資料を質的帰納的に分析した。

結果:82名に研究協力を依頼し、同意を得られた学生は32名(39.0%)であった。分析対象はグループ課題とした発表資料であるため、構成メンバー全員から同意を得られた3グループ18名を分析対象とした。学内シミュレーション演習に参加することで得られた学生の学びを分析した結果、83コード、22サブカテゴリ、10カテゴリを抽出した。10カテゴリとは、「全体像把握に向けた多面的な情報収集」「身体的側面への着目による看護ニーズの捉え直し」「日々変化する健康状態の把握困難に伴うアセスメントの重要性認知」などである。

考察:学生は事前に提供された文字による患者情報から病状や回復の状態をイメージできるものの、演習中に患者の身体状態が変化すると、その意味が学生自身では判断できず、観察の視点や自立度がどう変わるのかなどの理解が困難になったと考えられた。しかし、学生は看護の必要性を正しく認識するためには、患者の変化に応じて全体像を更新しアセスメントすることの重要性を学ぶことができたと考えられた。

KEY WORDS: simulation exercises, nursing process, simulated patient, student learning

I. 背景

臨地実習は、看護実践能力の育成に向け、学内で学んだ知識、技術、態度の統合を図りつつ看護方法を修得する極めて重要な授業である¹⁾。しかし、2020年新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、看護系大学でも臨地実習の実施が困難な状況となり、A大学も基礎看護学実習の代替を余儀なくされた。A大学の基礎看護学実習は、学生が初めて臨地において5日間を通して看護過程を学ぶ授業であり、看護実践能力の修得の基盤として不可欠であった。

この代替策について検討し、看護教育におけるシミュレーション教育は、実際の臨床場面を模擬的に再現して、その学習環境下で学習者が実際に経験し、仲間と共に振り返り、専門的な知識・技術を統合して実践力を向上させるものであり²⁾、これを実現させることによって、基礎看護学実習を代替しようと考えた。

そこで、代替する学内実習の教育方法として、模擬病棟を再現した環境において学生が5日間の看護過程を実際に経験することが実践能力の修得に資すると考え、シミュレーション演習を導入した。まず、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習では、模擬患者(SP: Simulated Patient, 以下SPとする)を用いて実際の臨床場面に近い状況下で5日間の看護過程を行うこととした。

看護過程とは、対象者・看護者の二者関係を基本的構造とし、看護者が対象者の全体像を描き、生命力を消耗させているものを探り、看護者のもてる力を差し出し、そのケアを体験した対象者の反応を観察、実施、評価しつつ、看護計画を修正するという過程である³⁾。新型コロナウイルスのパンデミック以降、看護基礎教育機関において臨地実習の代替として行われたシミュレーション演習は、看護過程をオンライン上で学ぶ遠隔型実習の報告^{4), 5)}や特定の技術項目や一部の場面のみ対面としたハイブリッド型実習の報告^{6)~10)}などはある。

しかし、模擬カルテからの情報をもとに看護計画を立

案し、SPにケアを実践しながらデブリーフィングを経て、SPの状態をアセスメントし看護計画の修正、実施、評価を連日行うというような看護過程を展開するシミュレーション演習に関する報告は極めて少ない。

そこで、本研究は、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において、SPの状況に合わせて段階的に看護過程を展開した学生の学びを明らかにし、看護過程の展開を目標とするシミュレーション演習の教育方法を検討することを目的とする。本研究の成果は、シミュレーション演習における看護過程展開の教育実践として、シミュレーション演習方法の質向上に向けた一助になると考える。

II. 目的

本研究の目的は、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において、SPの状況に合わせて段階的に看護過程を展開した学生の学びを明らかにすることである。

III. 用語の定義

本研究では用語を以下のように定義する。

看護：生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえること¹¹⁾。

看護過程：対象者・看護者の二者関係を基本的構造とし、看護者が対象者の全体像を描き、生命力を消耗させているものを探り、看護者のもてる力を差し出し、そのケアを体験した対象者の反応を観察、実施、評価しつつ、看護計画を修正するという過程である¹²⁾。

学び：佐伯が学びとは「わかることである」と述べている¹³⁾ことを参考とし、学習過程において学生自身が理解したと感じ考えたこととした。

IV. 研究方法

1. 対象者

2020年9月7日から9月18日のうちの5日間、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習に参加することになった2年次生82名とした。

2. シミュレーション演習の位置づけ

シミュレーション演習は、新型コロナウイルス感染症拡大予防の中で基礎看護学実習の代替として計画されたものである。A大学の基礎看護学実習は、指定規則の専門基礎分野の学習および看護過程展開に必要な技術を学習した後、2年次に受け持ち患者の看護過程を展開することを目標とし、看護の知識、技術、態度の統合を図る方法を学ぶ授業である。代替策としたシミュレーション

演習においても、臨地での基礎看護学実習と同様の目標とした。したがって、シミュレーション演習の目的・目標は、以下のように掲げた。

1) 演習目的

受け持ち患者の看護過程を展開する。

2) 演習目標

(1) 受け持ち患者の看護の必要性を認識する。

(2) 受け持ち患者に必要な看護を計画的に実施・評価する。

3. シミュレーション演習の評価指標

SPへの看護過程に対して、シミュレーション演習の評価を行った。その評価指標は、①SPの全体像を明確にできたか、②看護上の問題を明らかにできたか、③看護の方向性を見出すことができたか、④SPの安全・安楽・自立の観点から技術を提供していたか、⑤SPとのコミュニケーションや実践した行為に対する自己評価、とした。

4. 事前準備

演習目標達成に向け、臨床に近い環境下で学生がSPとの二者関係を基本構造とした看護過程を展開する場を整えることが必要であると考えた。そのため事前準備として、①演習室での病床再現、②医療物品の調達、③オンライン上のコミュニケーションツールにおける学生グループの作成、④各事例内容の作成、⑤日々の状況設定および到達目標、課題の設定、⑥模擬カルテ作成、⑦高機能シミュレーターの活用方法の検討、⑧演習案を作成後、模擬病棟で教員・SP・学生役を配置し実行可能かについてパイロット試験を実施、⑨患者の状況設定の作り込みが足りない部分を修正、⑩修正した演習案で再試験を実施し問題がないことを確認、⑪オリエンテーション動画の作成、⑫SPの人材確保、⑬SPへの情報提供と事例の詳細を説明した。

なお、演習に携わる教員全員がファシリテーションやデブリーフィングの方法、ファシリテーターの役割などについて、シミュレーション教育に精通する指導者より事前にレクチャーを受けた。

5. 演習スケジュールおよび指導体制

教員は、学生を5名から6名ずつの16グループに編成し、4グループの学生が同時に演習を実施した(表1)。1グループにつき教員1名が指導を担当し、看護師長役の教員を1名配置した。なお、シミュレーション演習に携わった教員数は9名であり、全員が平等に担当した。教員の臨床経験年数は 11.3 ± 7.0 年(平均 \pm 標準偏差)であった。

表1 シミュレーション演習のスケジュール (例：Aグループ/Bグループ)

日程	グループ	授業形態	到達目標
前週の金曜日	A B	—	・オンラインにて模擬患者事例を受け取り、演習に必要な既習知識・技術について事前学習し患者の全体像を大づかみにイメージできる。
1日目(月)	A	午前：対面演習	・演習を通して患者の全体像を大づかみに描き、述べることができる。 ・倫理的態度で患者に接することができる。
		午後：グループワーク(オンライン)	・演習で入手した客観的情報を統合し、患者の健康障害の種類と段階を説明することができる。 ・演習での患者との関わりについて、キングの目標達成理論を使い自己評価し、グループメンバーから他者評価を受ける。 ・2日目の状況設定に向け、グループの看護計画を立てる。
	B	午前：グループワーク(オンライン)	・午後の演習に向け、グループの看護計画を立てる。
		午後：対面演習	・演習を通して患者の全体像を大づかみに描き、述べることができる。 ・倫理的態度で患者に接することができる。
2日目(火)	A	午前：対面演習	・申し送りを聞き、前日に立案した看護計画の適切性を判断することができる。 ・立案した看護計画に基づき、安全・安楽・患者の自立を同時に満たすよう指導者とともに実践する。 ・看護に必要な不足情報について、観察やコミュニケーションを通して入手する。 ・観察やコミュニケーションを通して得られた内容等を看護師長に報告することができる。
		午後：グループワーク(オンライン)	・午前の模擬患者との関わりをグループメンバー間で振り返り評価する。 ・患者像を明らかにし看護問題を明確にする。
	B	午前：グループワーク(オンライン)	・演習で入手した客観的情報を統合し、患者の健康障害の種類と段階を説明することができる。 ・演習での患者との関わりについて、キングの目標達成理論を使い自己評価し、グループメンバーから他者評価を受ける。 ・午後の演習に向け、グループの看護計画を立てる。
		午後：対面演習	・申し送りを聞き、前日に立案した看護計画の適切性を判断することができる。 ・立案した看護計画に基づき、安全・安楽・患者の自立を同時に満たすよう指導者とともに実践する。 ・看護に必要な不足情報について、観察やコミュニケーションを通して入手する。 ・観察やコミュニケーションを通して得られた内容等を看護師長に報告することができる。
3日目(水)	A	1日：グループワーク(オンライン)	・長期、短期の看護問題、目標を明確にし、看護計画を立案し提出する。 ・4日目の状況設定に向け、具体的にグループの看護計画を立て提出する。
	B		
4日目(木)	A	午前：グループワーク(オンライン)	・午後の演習に向け、グループメンバー各自が明確な患者像を説明することができる。
		午後：対面演習	・立案した看護計画に基づき、模擬患者に必要な看護技術を使い実践する。
	B	午前：対面演習	・立案した看護計画に基づき、模擬患者に必要な看護技術を使い実践する。
		午後：グループワーク(オンライン)	・午前の対面演習の看護実践を安全・安楽・患者の自立の視点から評価する。 ・看護計画の適切性を討議する。 ・討議結果に基づき、看護計画を修正することができる。 ・5日目の状況設定に向け、具体的にグループ計画を立てる。
5日目(金)	A	午前：グループワーク(オンライン)	・4日目の対面演習の看護実践を安全・安楽・患者の自立の視点から評価する。 ・看護計画の適切性を討議する。 ・討議結果に基づき、看護計画を修正することができる。 ・午後の状況設定に向け、具体的にグループ計画を立てる。
		午後：対面演習	・立案した看護計画に基づき、模擬患者に必要な看護技術を使い実践する。
	B	午前：対面演習	・立案した看護計画に基づき、模擬患者に必要な看護技術を使い実践する。
		午後：グループワーク(オンライン)	・5日目の対面演習の看護実践を安全・安楽・患者の自立の視点から評価する。

6. 演習方法・内容

看護のシミュレーション教育において期待されるアウトカムを達成するためのフレームワークの1つとして、INACSLベストプラクティススタンダード^{14)~16)}がある。このフレームワークは、シミュレーションデザイン、シナリオ、アウトカム等の基準が示されている。本研究で

は、シミュレーション教育に精通する指導者とのディスカッションを通してフレームワークを参考にシミュレーションデザインを検討し、以下のように実施した。

1) SP事例

演習は、1名のSPをグループ単位で受け持つこととした。SPは4名の教員と大学院生が担い、10日間を通

して同じ事例を担当した。SPは事例の状況設定に基づき役になりきり、学生とのコミュニケーションは自由に行った。SP事例は、厚生労働省が公表する3大死因¹⁷⁾および、糖尿病有病率の急激な増加¹⁸⁾の報告をもとに、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患、糖尿病を選定した。事例作成にあたり、筆者らの20年以上の臨床経験を踏まえ、実際の看護場面に近い状態を再現できるよう、身体状態の経時的変化や創傷治癒過程、検査データ、リハビリ状況など矛盾が生じないように検討しながら進めた。事例の概要は表2に示す。

学生には、演習開始前にオンライン上で、受け持つSPの最小限の患者情報および演習1日目の課題を提示し、事前学習を課した。以後の課題と到達目標は、前日のシミュレーション演習終了後に提示した。また、紙上の模擬カルテを用い、連日患者情報を更新した。

2) シミュレーション演習 (対面)

対面によるシミュレーション演習は、A大学の演習室に病棟を再現し実施した。模擬病棟において、学生は演習目標達成に向け、5日間の日程で、情報収集、アセスメント、看護計画の修正、SPとの関わりを通して看護計画に基づいた看護を連日実践した。演習の流れは、①ナースステーションにて模擬カルテより情報収集を行う、②グループメンバー全員で看護師長役の教員から申し送りを聞く、③メンバー全員で申し送り内容を踏まえた行動計画に修正する、④修正した行動計画の妥当性を教員と検討する、⑤行動計画に基づき代表者がSPと関わり、残るメンバーは参加観察する、⑥学生とSPが関わる様子は全てメンバーがタブレット端末で撮影する、⑦メンバー全員がバイタルサイン測定や清潔ケアなどの看護技術を毎日偏りなく経験できるようグループで話し合い交代しながらSPと関わる、⑧SPとの関わりが終わる毎にナースステーションに戻り、その関わりについてメンバー間で振り返りを行う、⑨代表者1名が看護師長

にコミュニケーションや観察により得られた内容、清潔ケアによるSPの反応などを報告、⑩メンバー間で気になる場面を話し合い、撮影した映像を視聴し実践場면을共有する、とした。なお、呼吸音や心音、瞳孔反射などの観察は、SPではなく予め設定したシミュレーターを使用した。

3) グループワーク (オンライン)

オンラインによるグループワークは、情報整理・アセスメント・問題の明確化、計画立案、模擬病棟で実施した看護の評価を連日実施した。また、教員は模擬病棟におけるメンバー間での振り返りが十分ではないと判断した場合、グループワークに参加し、リフレクションの支援を行った。

4) 学習内容の補完とフィードバック

看護過程の展開に向け、演習2日目には看護過程とその評価について講義動画を配信し、学習内容を補完した。また、学生には個人課題として毎日の演習記録の提出、グループ課題として演習3日目に患者情報の整理や看護計画立案等の課題を課し、教員よりフィードバックした。

7. 演習のまとめ

演習のまとめは、演習が終了した2週間後より1回180分の授業を4回実施し、以下の課題を出した。①個人課題として学生とSPの関わりをプロセスレコードに記述し、学生の関わりはSPの生命力の消耗を最小にするよう生活過程をととのえる実践になっていたのかを自己評価する、②グループ課題として、情報整理しアセスメントした患者特性、SPとの関わりをプロセスレコードから分析した内容、シミュレーション演習への参加により得られた学びを発表する。発表時間は15分とした。発表資料として、音声を録音したパワーポイントと発表原稿の事前提出を求めた。教員は、発表音声の入ったパワーポイントをオンラインで配信し、学生間での相互評

表2 模擬患者の事例概要

事例A	50歳代、男性。左側舌がん、糖尿病性網膜症。 3ヶ月前、難治性の口内炎。1ヶ月前に口腔内出血あり近医受診。改善見られず2週間前に左側舌がんと診断され入院。入院翌日、舌悪性腫瘍切除術、頸部リンパ節郭清、大胸筋皮弁再建術、気管切開術試行。
事例B	60歳代、女性。脳梁膨大部腫瘍、同名性半盲、右上肢麻痺。 40日前、飼い猫の名前がわからなくなる。その直後の1週間、頭痛・嘔気が続く。2週間前、病院受診しMRIにて脳梁膨大部に神経芽腫の疑いにて入院。腫瘍摘出術施行後、放射線療法と化学療法を併用し加療予定。夫と娘との3人暮らし。
事例C	40歳代、男性。拡張型心筋症、補助人工心臓植え込み(3年前)。 1ヶ月前、経皮ケーブルとポンプポケット感染にて、植込み型補助人工心臓交換目的で緊急入院。無職。妻と2人暮らし。術後脳梗塞を発症し、左上下肢麻痺あり。
事例D	70歳代、女性。肺水腫、糖尿病性腎症、糖尿病性壞疽、高血圧。 40歳糖尿病、60歳代後半より糖尿病性腎症による浮腫で入退院を繰り返す。透析を勧められたが拒否。同年、小脳梗塞にて右不全麻痺となる。今回は、夜間呼吸困難出現にて救急搬送。肺水腫と診断され緊急透析。

価を依頼した。

8. 分析方法

1) 分析対象

グループ課題とした発表資料

2) 分析方法

分析方法は、質的記述的分析方法を用いた。具体的な方法を以下に示す。

(1) グループ課題とした発表資料を元に、シミュレーション演習において看護過程の展開を通して得られた学生の学びの内容を整理し分析素材を作成した。

(2) 学生が演習を通して何を学んだのかを分析の視点とし、レポート内容から学生が得た学びを明らかにした先行研究の手法¹⁹⁾を参考に、本研究は「学内シミュレーション演習に参加した学生は、看護実践能力習得の視点からみると何を思考しどのような学びを得たのか」の観点から、質的帰納的に分析した。具体的には、パワーポイントと発表原稿の記述を熟読し、“～学んだ”、“～がわかった”、“～に気づいた”などの学びの要素を示す記述に注目した。グループ発表資料毎に得られた回答を文脈の意味のまとまりを崩さないよう区切り、コード化した。次に、コードの意味内容の同質性、異質性に基づき分離、統合し集合体を形成した。形成した集合体に先述した同じ視点から共通性を発見、命名しサブカテゴリ化、さらに抽象度をあげカテゴリを生成する分析過程を経た。

なお、分析は看護学研究に精通する複数の研究者からコード化、カテゴリ化の段階でスーパーバイズを受け、分析内容を複数回検討した。また、結果について研究参加者である学生のうち協力の得られた者4名にメンバーチェックを依頼し、真実性を確保した。

9. 倫理的配慮

本研究は、千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した(NR3-14)。研究対象者には、本授業の成績評価提出後に授業を担当していない教員より学内メールで依頼した。研究依頼文および研究者の遵守事項の文書を添付し、研究目的と方法、人権擁護に対する配慮、自由な意思決定による研究参加に関して説明した。研究協力を同意する者には、添付した同意書に署名しメールに返信するよう依頼した。研究協力の諾否に関わらず、成績には一切関係しないことを説明した。

V. 結果

シミュレーション演習に参加する2年次生82名に研究協力を依頼し、同意を得られた学生は32名(39.0%)であった。本研究の分析対象はグループ課題とした発表資

料であり、構成メンバー全員から同意を得られた3グループ、18名の学生が対象となった。3グループが受け持ったSP事例は、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患であった。分析の結果、83コード、22サブカテゴリ、10カテゴリを抽出した(表3)。以下に分析結果を示す。カテゴリを【 】、サブカテゴリは〈 〉で表す。

1) 【事前学習による患者の病態把握】

学生は、演習前にSP事例を提示されると【事前学習による患者の病態把握】が必要であることを学んでいた。SPの身体状況を事例概要から把握するために、〈事前学習による障害された臓器の生理機能や術式を学習する必要性〉や〈事前学習による正常な臓器との比較による病態理解の必要性〉を認識していた。

2) 【患者の全体像把握に向けた多面的な情報収集】

学生は、事前学習による生理機能や病態を踏まえ【患者の全体像把握に向けた多面的な情報収集】が必要であることを学んでいた。SPの全体像を捉えるためには〈生活過程を踏まえた患者の全体像把握の必要性〉に加え、発達段階や疾病・障害の段階など〈多方面の情報収集・統合により全体像を把握する大切さ〉を認識していた。

3) 【立場の変換による患者の心情理解】

学生は、SPとの関わりを通して【立場の変換による患者の心情理解】を学んでいた。学生は、SPとのコミュニケーションにおいて、患者の病気に対する思いを聞き〈患者の気持ちに近づくことによる患者の思いの理解〉を認識していた。また学生は、患者の立場に自分を置き換えて想像してみると〈患者の身体状況を自分の身体に置き換えることによる患者の思いの理解と病状安定への希求〉をし、〈立場の変換による患者の置かれた状況の理解〉ができると捉えていた。

4) 【患者の回復促進に向けた看護技術の選択と提供】

学生は、看護ケアを考え実践する中で、【患者の回復促進に向けた看護技術の選択と提供】の重要性を学んでいた。学生はSPの上肢が拘縮する可能性があると判断し〈拘縮予防に向けた看護技術の選択と提供〉の必要性を認識した。また、清拭を行う際に、SP自身でできることを見極め、患者に協力を依頼した経験から〈患者の自立を考え看護技術を提供する大切さ〉を学んでいた。

5) 【患者の心身状態の変化に基づく看護実践の適否評価】

学生は、自身の行った看護について【患者の心身状態の変化に基づく看護実践の適否評価】を学んでいた。学生は、足浴を行った後にSPの「気持ち良かった」という発言や穏やかな表情に変化する様子を観察し、マッサージにより末梢冷感が改善した状況を振り返り、〈患

表3 基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において看護過程を展開した学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	グループ課題とした発表資料の代表的な記述
事前学習による患者の病態把握	事前学習による障害された臓器の生理機能や術式を学習する必要性 (8)	・事前学習として障害されている脳の構造や機能を調べる必要があるとわかった (B) ・事例概要にある手術方法や内容を理解できず学習する必要性に気づいた (A)
	事前学習による正常な臓器との比較による病態理解の必要性 (3)	・事前学習では、拡張型心筋症の病態を正常な心臓と比較すると理解しやすいことを学んだ (C)
患者の全体像把握に向けた多面的な情報収集	生活過程を踏まえた患者の全体像把握の必要性 (4)	・患者の全体像を捉えるためには、今の状態をみるだけでなく、これまでの生活過程を辿ることが必要だとわかった (A) ・補助人工心臓が、拡張型心筋症を抱える患者の生活にどのような影響を与えたのかイメージすることが重要であると感じた (C)
	多方面の情報収集・統合により全体像を把握する大切さ (2)	・発達段階と、これまで生きてきた生活の特徴を重ねて考えることが全体像を捉えるために大切であるとわかった (B) ・健康障害の種類や段階、発達段階、生活過程の情報を統合すると、患者の特性を捉えることができた (C)
立場の変換による患者の心情理解	患者の気持ちに近づくことによる患者の思いの理解 (1)	・患者の気持ちに近づくことで、糖尿病に対する患者の思いを理解できた (A)
	患者の身体状況を自分の身体に置き換えることによる患者の思いの理解と病状安定への希求 (1)	・自分の身体にドライブラインの感染が起こったと想像すると、患者の辛い思いが理解できドライブラインの感染を繰り返して欲しくないと考えた (C)
	立場の変換による患者の置かれた状況の理解 (2)	・人工心臓を装着している患者の立場に立つことで、患者自身の心の対立があるとわかった (C) ・患者の立場に立ち、人工心臓とともに生きていくことへの不安解消が必要だとわかった (C)
患者の回復促進に向けた看護技術の選択と提供	拘縮予防に向けた看護技術の選択と提供 (2)	・右上肢の拘縮予防のために、マッサージと手浴による血行促進のケアを計画することが必要であるとわかった (B) ・拘縮予防のために良肢位を整えることが必要な看護だとわかった (C)
	患者の自立を考え看護技術を提供する大切さ (2)	・創部の感染予防に向け清拭を実施し、その中で患者ができる部分は依頼することで、患者のもてる力を発揮させる看護であったと学んだ (A, C)
患者の心身状態の変化に基づく看護実践の適否評価	患者の心身状態の変化を観察することによる看護実践の適否判断 (4)	・手浴と足浴が快刺激となり、患者の気持ちを変化させることができ、良い実践であることがわかった (C) ・マッサージにより末梢冷感を改善でき、患者の身体に良い変化をもたらす実践であったことを振り返った (B)
患者の急変を契機とした病態理解の深化	客観的データの振り返りによる急変の予兆認知 (15)	・あらためてデータを振り返ると急変前日から高リスクであったことがわかり、演習で変化を捉えられていれば急変を防ぐことができたかもしれないと学んだ (B, C) ・心電図の経過を振り返り、心房性期外収縮が徐々に増えていたことを発見した (C)
	急変を契機に体内で起きている変化を振り返る必要性 (11)	・急変はハプニングと捉えて良かったのかと疑問がわき、改めて身体の中で何が起こっていたのかについて振り返る必要があると気づいた (C)
患者の身体的側面への着目による看護ニーズの捉え直し	一般的な回復過程の基準と比較することによる患者の身体状態の把握 (5)	・NYHA分類に基づき転換点となった患者の身体状態を推察した (C) ・創傷治療過程の中での段階にあるかを確認することで回復の状況を確認することができた (A, B, C)
	客観的データと身体状態を関連づけた振り返り (3)	・バイタルサインのデータと患者の身体状況の変化を合わせて振り返ることが大切であると学んだ (A, B, C)
	患者の体内で起きていることへの着目による看護のニーズの捉え直し (2)	・患者の身体内部で起きていることがわかることで、目には見えていない看護のニーズを捉え直すことができた (B, C)
理論と実践の統合による看護の役割理解	演習体験による看護の役割の理解 (2)	・看護の定義と比較して演習体験を振り返ると、看護の役割が何かについて理解することができた (B, C)
	理論書から実践を振り返ることによる看護の役割の理解 (1)	・ナインゲルの書から実践を振り返ることで看護とは何かを理解でき、看護師の存在意義について実感できた (C)
看護技術の未熟さ自覚による課題の明確化	患者への誠意ある回答困難による課題の自覚 (1)	・患者から心臓の状態について聞かれたが、はぐらかす返事をしてしまい適切に答えられるよう患者の身体の状態を理解しておく必要があるとわかった (C)
	理論書による分析に伴うコミュニケーションの課題自覚 (4)	・コミュニケーションが上手く取れず理論書で分析した結果、全て一方通行のコミュニケーションであったことがわかり、コミュニケーションを使える技術にする訓練が必要だとわかった (A, B, C)
日々変化する患者の健康状態の把握困難によるアセスメントの重要性認知	顕在化している問題に意識が集中していることへの自覚 (1)	・身体内部で起きていることを振り返ると、目に見えているケーブルの消毒に意識が集中していたことに気づいた (C)
	日々変化する患者の健康状態の把握困難による臨地実習の学習イメージ獲得 (7)	・患者の状態が日々変化する中で、今の状態がわからないまま実習が終わったが、臨地実習での状況がイメージできた (A, B, C)
	日々変化する患者の健康状態の把握困難による看護実践に向けたアセスメントの重要性認知 (4)	・身体の状態を捉えようとするが、毎日何かが起こって対応しているうちに終わってしまい、看護を行うためには日々の患者の状態を理解して実習することが大切だとわかった (B, C) ・日々の出来事や背景や意味がわからず、何かやらないといけないという思いだけが先行していたが、そうではなくアセスメントした上で看護を行う必要があると学んだ (C)
	患者の身体状態の変化に応じた看護目標の立案困難に伴う回復に向けた目標設定の重要性認知 (2)	・知識がなく、患者の身体状態の変化に合わせた看護目標が定まらない状態だったが、目標を定めなければ患者の回復を支援できないとわかった (B, C)

*サブカテゴリの () は、コード数を表す

者の心身状態の変化を観察することによる看護実践の適否判断)をし、患者の変化を軸として自身の看護実践を評価することを学んでいた。

6) 【患者の急変を契機とした病態理解の深化】

学生はSPの急変を目の当たりにし、【患者の急変を契機とした病態理解の深化】を学んでいた。学生は急変のエピソードを振り返り(客観的データの振り返りによる急変の予兆認知)ができると捉え、心電図異常や急変の高リスク状態であったことを確認した。また、演習中には急変をハプニングと捉えていたが(急変を契機に体内で起きている変化を振り返る必要性)を認識していた。

7) 【患者の身体的側面への着目による看護ニーズの捉え直し】

学生は、グループワークを通して【患者の身体的側面への着目による看護ニーズの捉え直し】について学んでいた。学生は(一般的な回復過程の基準と比較することによる患者の身体状態の把握)や(客観的データと身体状態を関連づけた振り返り)といった(患者の体内で起きていることへの着目による看護のニーズの捉え直し)ができることを認識していた。

8) 【理論と実践の統合による看護の役割理解】

学生は、演習体験と理論書を用いた看護実践の振り返りを通して【理論と実践の統合による看護の役割理解】について学んでいた。学生は(演習体験による看護の役割の理解)を捉え、既修得の理論書を用いて看護実践を振り返る経験を通し、(理論書から実践を振り返ることによる看護の役割の理解)につながると考えていた。

9) 【看護技術の未熟さ自覚による課題の明確化】

学生は、SPとの相互行為を通して【看護技術の未熟さ自覚による課題の明確化】を体験していた。学生はSPからの質問にごまかす返答をし、(患者への誠意ある回答困難による課題の自覚)を捉えていた。また、グループワークで自身の看護を振り返り(理論書による分析に伴うコミュニケーションの課題自覚)により、一方通行のコミュニケーションであったことを認識した。さらに、看護技術を提供する際、(顕在化している問題に意識が集中していることへの自覚)を捉えていた。

10) 【日々変化する患者の健康状態の把握困難によるアセスメントの重要性認知】

学生は、5日間の演習を振り返り【日々変化する患者の健康状態の把握困難によるアセスメントの重要性認知】について学んでいた。学生は(日々変化する患者の健康状態の把握困難による臨地実習の学習イメージ獲得)といった実習のリアルな状況を感じていた。また、(日々変化する患者の健康状態の把握困難による看護実

践に向けたアセスメントの重要性認知)や(患者の身体状態の変化に応じた看護目標の立案困難に伴う回復に向けた目標設定の重要性認知)といった看護過程の価値を認識していた。

VI. 考 察

本研究は、基礎看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において、模擬カルテからの情報をもとに看護計画を立案し、SPにケアを実践しながらデブリーフィングを経て、SPの状態をアセスメントし看護計画の修正、実施、評価を連日行い、連続して看護過程を展開した学生の学び10カテゴリを抽出した。本章では、明らかにした学生の学びを考察し、臨地実習の代替策とした看護過程の展開を目標とするシミュレーション演習の教育方法を検討する。

1. シミュレーション演習参加による学生の学び

学生は、SPの情報から【事前学習による患者の病態把握】をした後、SPとの関わりを通して【患者の全体像把握に向けた多面的な情報収集】をしていた。黒田は、全体像を捉えることの重要性を強調し、全体像を捉えられないと情報は多く得られているのに情報の意味内容が分からなくなり、患者の健康問題が見えない²⁰⁾ことを指摘している。臨地では、集めた情報の中から看護に必要な客観的情報を統合し、全体像を捉えると同時に実際の患者は状況が刻一刻と変化し理解が困難なこともあるが、シミュレーション演習ではその変化をある程度コントロールでき、これは対象理解に利点であると考えられる。

また、学生はSPとの関わりを通して、【立場の変換による患者の心情理解】や【患者の回復促進に向けた看護技術の選択と提供】、【患者の心身状態の変化に基づく看護実践の適否評価】を学んでいた。加悦らの研究では、SPが演習に参加することにより、学生はSPとの相互作用の中で患者の反応を直接観察することができ、患者を具体的にイメージできる²¹⁾ことを明らかにした。SPは教員や大学院生が担当していたため年代も異なり限界はあったものの、学生はシミュレーション演習という特殊な環境下であってもSP活用による看護の疑似体験によりSPが作りだす現実世界に没入し、患者の立場へと気持ち動く経験ができたかと推察する。

さらに、学生はSPとの関わりからコミュニケーションが一方通行であったことを振り返り【看護技術の未熟さ自覚による課題の明確化】という学びをしていた。SP導入による学生の学びを明らかにした小手川らの報告では、学生はSPとの関わりを通して自己の技術不足を認識し、援助の難しさを体験することにより自己課題

を発掘し学習意欲が向上する²²⁾と述べている。学生はSPとの関わりを通して、実践した看護技術を自己評価し、現状の修得レベルを自覚することにより課題を明確化できたと考えられ、課題の克服に向けて意欲が高まる経験となったと推察する。

加えて、学生は演習を振り返り【患者の急変を契機とした病態理解の深化】といった医学的・看護学的知識を活用し【患者の身体的側面への着目による看護ニーズの捉え直し】ができることを学んでいた。しかし、演習中の学生は、SPの急変をハプニングと捉えていた。この状況は、学生には臨地実習の経験がなく、臨床の現実を認識することができなかつたことが要因であるとともに、自己防衛機制を働かせていたのではないかと考える。防衛機制は、困難な問題に直面したとき、無意識のうちに正面から向き合うことを避け、自分を守ろうとする心の仕組みである²³⁾。シミュレーション演習は、学習者の心理的安全性を守り、失敗の許される環境下で行われる²⁴⁾ものの、急変を目の当たりにした学生は困難な状況と捉え、看護者として急変に向き合うことを避け、学習者の立場となり心の安定を保とうとしたのではないかと推測される。そのため、演習開始直前にシナリオの説明やフィクションでの約束事の合意形成、シミュレーターの使用方法などプレブリーフィングを丁寧に行うことが心理的安全性の確保に重要な取り組みであり、プレブリーフィングの充実が学習者の学習意欲につながると考える。またSPの急変時に、教員が学生の気づきを促すヒントとなる資料を提示することにより、学生は患者の身体的側面の変化を理解し、看護者として急変に向き合うことができた可能性がある。

また、学生は演習を振り返り【理論と実践の統合による看護の役割理解】の学びを得ていた。理論とは、現象を記述、説明、予測、制御しようとする²⁵⁾ものであり、看護実践を意味づけることに役立つ。学生は演習における体験について、理論書を活用することにより看護を本質的に捉え、看護師の存在意義や役割理解といった深い学びに繋がったと考えられる。

2. 演習目標の達成状況

学生は、演習を通して【患者の全体像把握に向けた多面的な情報収集】から看護上の問題や看護の方向性を明らかにし、【患者の回復促進に向けた看護技術の選択と提供】を行い、【患者の心身状態の変化に基づく看護実践の適否評価】と【看護技術の未熟さ自覚による課題の明確化】を学ぶことができ、演習目標は達成されたと考えられた。しかし、SPの健康状態の変化を目の当たりにすると、【日々変化する患者の健康状態の把握困難に

よるアセスメントの重要性認知】を学び、変化する健康状態の把握が難しいという経験により、看護を行うためにはアセスメントが大切であると捉えていた。この日々変化する健康状態を把握できない状況は分析対象グループ全てに共通しており、学生は事前に提供された文字による患者情報から病状や回復の状態をイメージできるものの、演習中にSPの身体状態が変化すると、その意味が学生自身では判断できず、観察の視点や自立度がどう変わるのかなどの理解が困難になったと考えられた。

看護は、患者の看護の必要性を認識できることが求められる。学生は演習のまとめの時間を通して、日々変化するSPの健康状態を把握できなかった状況を振り返り、患者の健康状態の変化を捉えなければ適切な看護問題や目標の設定には至らず、看護の必要性を正しく認識できないことに気づいた。この経験から、学生は患者の健康状態に即した看護の必要性を認識するためには、患者の全体像を更新し、アセスメントすることが重要であると認識できたと考えられる。

また、伊藤らの報告によると、看護学部3年次後期の成人看護学実習の代替策としたシミュレーション演習において、学生は「変化を追いながらその時々状況を捉え援助を考える必要がある」²⁶⁾という学びを明らかにしていた。本研究と伊藤らの研究では学年が異なりレディネスの違いはあるものの、健康状態の変化を捉えようとする点は一致していた。しかし、本研究が明らかにした【日々変化する患者の健康状態の把握困難によるアセスメントの重要性認知】の学びは、5日間のシミュレーション演習において、初めて患者の看護過程を展開する学生の状況を表すものであると考えられる。学生は、健康状態の変化の意味を捉えることが難しいと推察されるが、心理的安全性が確保されているシミュレーション演習であるからこそ、このような演習が現実の実践での経験につながると考える。演習で学生の理解を促進するには、今動く時だというキューをタイミング良く与え、その時の動きを客観的に振り返り、行った看護の意味を考えるデブリーフィングを充実させることが重要であると考えられる。

3. 臨地実習の代替策とした看護過程を目標とするシミュレーション演習の教育方法の検討

本研究成果より、学生と患者の二者関係を基本的構造として5日間の看護過程を行うシミュレーション演習は、学生の看護実践能力の育成に効果的であることが明らかになった。一方、【日々変化する患者の健康状態の把握困難によるアセスメントの重要性認知】の結果から、日々変化する健康状態の把握が非常に難しいという

課題も明らかになった。

シミュレーション教育におけるデブリーフィングは、「実施した行為を裏付ける知識・技術・態度を確認しあう学習支援方法」²⁷⁾であり、シミュレーション教育の流れの中で重要な部分とされている。看護過程の展開を目標とするシミュレーション演習では、学生が目の当たりにした患者の変化を意味づける支援を十分に考慮したシミュレーションデザインを検討し、学生が現実の状況から逃げないように心理的安全性を確保するためのプレブリーフィングを丁寧に行うことが重要となる。また、患者の健康状態が大きく変化する場面においては演習中にヒントとなる資料を提示することや、患者の身体状態の変化についての気付きを促し、学びの深化に向けたデブリーフィング充実の必要性が示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は1教育機関の学生に限定されているうえ、グループ課題とした発表資料を分析対象としたため、構成メンバー全員から同意の得られた3グループのみが対象となった。そのため、学びの結果に反映されていないデータや偏りが生じている可能性がある。また急遽、基礎看護学実習の代替策としてシミュレーション演習を行うこととなり、SPの質保証に向けたトレーニングの時間確保ができなかったため、今後の課題とする。

利益相反

本研究における利益相反はない。

謝辞

本稿の分析を行うにあたり、ケースレポート発表資料の活用を承諾して下さった学生の皆さまには心より感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費22K10676の助成を受けたものです。

著者資格

M.Tは研究の着想、デザイン、データ収集と分析、原稿作成のプロセス全体に貢献した。S.Sはデータ分析、原稿作成のプロセスに貢献した。全ての著者は最終原稿を読み、承認した。

引用文献

- 1) 文部科学省：看護学教育の在り方に関する検討会報告、「臨地実習の在り方の項」, 2002.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3_1(2023年11月22日)

- 2) 阿部幸恵：新人&先輩ナースのためのシミュレーション・シナリオ集 夏編, 日本看護協会出版会, 3-7, 2014.
- 3) 薄井坦子：看護のための疾病論 ナースが視る病気, 講談社, 12, 1987.
- 4) 西本葵, 佐居由美, 樋勝彩子, 他：シミュレーション演習を実装した完全遠隔型実習の試み—コロナ禍における基礎看護学実習一, 日本看護技術学会誌, 21: 23-28, 2022.
- 5) 村上佳栄子, 志澤美保, 薄井香苗, 他：感染症対策における健康教育の新しい取り組み—リモートでの集団指導の課題と可能性一, 京都府立医科大学看護学部紀要, 31: 73-78, 2021.
- 6) 中西恵理, 林有学, 須藤聖子, 他：基礎看護学実習におけるリモート実習と模擬患者を活用した看護技術演習に関する実践報告, 幾中央大学紀要, 18(2): 19-32, 2021.
- 7) 中川ひろみ, 房間美恵, 浅井直子, 他：新型コロナウイルス感染症パンデミック禍におけるハイブリッド型成人看護学実習に関する実施報告, 宝塚大学紀要, 35: 139-145, 2022.
- 8) 石塚睦子, 正藤倫音, 小室早苗, 他：新型コロナウイルス緊急事態宣言下における成人看護学実習(周手術期)の展開—学内実習内容と学生アンケート結果の報告一, 了徳寺大学研究紀要, 16: 75-89, 2022.
- 9) 宇野真由美, 横山友子, 隅田千絵, 他：新型コロナウイルスの影響下における基礎看護学実習II：教員からみた学内代替実習の学習効果の検討, 四條畷学園大学看護ジャーナル, 5: 17-24, 2021.
- 10) 香川将大, 渡邊美和, 岡本佐智子：COVID-19禍の成人看護学実習I(急性期)におけるブレンディッドラーニングの実践報告, 東都大学紀要, 11(1): 51-60, 2021.
- 11) 薄井坦子：看護学原論講義 改訂版第12版, 現代社, 126, 1984.
- 12) 前掲3).
- 13) 佐伯胖：「学び」の構造, 第35版, 東洋館出版社, 65, 1975.
- 14) INACSL Standards Committee: INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM Simulation Design, *Clinical simulation in Nursing*, 12: S5-S12, 2016.
- 15) INACSL Standards Committee: INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM Debriefing, *Clinical simulation in Nursing*, 12(S): S21-S25, 2016.
- 16) INACSL Standards Committee: INACSL Standards of Best Practice: SimulationSM Facilitation, *Clinical simulation in Nursing*, 12(S): S16-S20, 2016.
- 17) 厚生労働省：令和2年人口動態統計, 性別にみた死因順位別死亡数・死亡率・構成割合, 2020.
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei20/dl/10_h6.pdf(2024年3月25日)
- 18) 厚生労働省：平成28年国民健康・栄養調査結果の概要, 2016.
https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/kekagaiyou_7.pdf

(2024年3月25日)

- 19) 岡田麻, 今井多喜子, 井上誠, 他: 既習の知識と技術を統合する多重課題演習とシャドウイング実習から得られた3年次看護学生の学び, 日本看護科学学会誌, 37: 446-455, 2017.
- 20) 黒田裕子: 教員のための看護診断入門 看護における看護診断の位置づけ 看護過程と看護診断, 看護教育, 35: 655-661, 1994.
- 21) 加悦美穂, 河合千恵子: SP(模擬患者) 参加型授業において学生が思い描く患者像の理解, 日本医学看護学教育学会誌, 16: 20-26, 2007.
- 22) 小手川良江, 阿部オリエ, 本田多美枝, 他: 看護学実習前演習への模擬患者導入による学生の学びの実際—学生の体験・気づきから生じた変化に着目して—, 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 12: 47-56, 2013.
- 23) 濱嶋朗, 竹内郁郎, 石川晃弘: 社会学小辞典, 新版増補版, 「防衛機制」の項, 有斐閣, 561, 2015.
- 24) Rudolph. J. W., Raemer. D. B., Simon. R: Establishing a safe container for learning in simulation: the role of the pre-simulation briefing, *Simulation in Healthcare*, 9(6): 339-349, 2014.
- 25) Chapman CM: Theoretical nursing: Development and progress, *Journal of Advanced Nursing*, 11(2): 237-238, 1986.
- 26) 伊藤加奈子, 唐津ふさ: COVID-19流行下における成人看護学実習学内代替実習プログラムの評価, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 18(1): 65-74, 2022.
- 27) 阿部幸恵: 臨床実践力を育てる! 看護のためのシミュレーション教育, 医学書院, 102, 2013.

SIMULATION EXERCISES AS AN ALTERNATIVE TO BASIC NURSING PRACTICE CONDUCTED IN THE MIDST OF THE COVID-19 PANDEMIC

Mariko Tobise, Shinobu Saito
Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

simulation exercises, nursing process, simulated patient, student learning

Objective: The purpose of this study was to clarify student learning through step-by-step nursing processes with a simulated patient in a simulation exercise, which was an alternative to basic nursing practices.

Method: Participation was requested from 82 second-year students who participated in a 5-day simulation program, 32 (39.0%) of whom agreed to participate and provided informed consent. The group presentation materials used as the final project in the program were analyzed qualitatively and descriptively. Presentation materials from three group assignments were then analyzed.

Results: An analysis of student learning resulted in the extraction of 83 codes, 22 subcategories, and 10 categories, including "Gathering multifaceted information for a complete profile of the patient," "Reconsidering nursing needs by focusing on physical aspects," and "Recognizing the importance of assessment due to difficulties in understanding health conditions that change daily."

Discussion: Although students were able to imagine disease and recovery status from written patient information provided in advance, we considered that, once the patients' physical conditions changed during the simulation exercise, the students were unable to judge the meaning by themselves and found it difficult to understand how their observation viewpoints and patients' independence levels would be affected. On the other hand, this finding also suggested that students were able to learn the importance of updating and assessing the overall picture in response to changes in patients so as to recognize properly the needs of nursing care.